

Q. デジタル教科書はありませんが、音楽の授業でICTを使って授業を行いたいと思っています。効果的な教材活用例を教えてください。

A. ICTに関して苦手意識を持っている先生方はたくさんいますが、一度ICTを活用すると、授業効果を実感でき、作成データは保存可能なため次回の授業でも使えて授業準備の効率化が図れます。

電子黒板や電子黒板機能付きプロジェクターとパソコンをつないで使用する活用方法や効果を紹介しします。どちらも画面上でクリックして拡大したり、タッチペンで文字を書いたりラインマーカーで印をつけたりすることができます。

※ 事前準備

使用したい楽譜や写真、ワークシートなどの資料をスキャナーで読み取り、編集可能な形式で保存します。編集ソフトを使ってトリミングを行ったり、不要な部分を削って編集して保存します。それらをパワーポイントに取り込むと、クリック一つでタイミング良くスムーズな授業展開が可能になり、たいへん便利です。

① 「音の視覚化」・・・音の進行に合わせて旋律を指し示せるので、今、楽譜のどの部分を歌っているのか、また、課題となっている部分はどこなのか明らかになり、読譜を苦手としている生徒にもわかりやすく、読譜力もついてきます。

生徒の気づきを共通の楽譜で確認することができるため、課題をよりはっきりさせて学習を進めることができます。

② 「拡大提示」・・・音楽室は椅子のみで授業を行うことが多いので、楽譜を手を持って歌うときは良いのですが、楽器を演奏したりする時は一人ひとりが譜面台を用意しなければなりません。そんな時、拡大楽譜を提示すると、視線が前を向き、歌う姿勢や演奏する姿勢が良くなります。

また、教科書の写真を取り込んだり、関連する画像を拡大して提示することで、集中して画面を見ながら楽曲を聴いたり表現することができます、イメージを膨らませることができます。

③ 「重点的に指導したい部分を的確に伝えられる」・・・オーケストラの画像を見ながら楽曲を鑑賞する場面では、主旋律を演奏している楽器を指し示したり、ペン機能を使って書き込んだりすることで、オーケストラの楽器をあまり目にしたことのない生徒もどんな楽器で演奏しているかわかり、楽器の形と音色を理解することができます。

また、使用するワークシートを画面に提示して指し示しながら説明すると、記入方法や注意点などを口頭で伝えるより、理解しやすくなります。

④ 「繰り返しの良さ」・・・楽譜上にペン機能を使って書き加えながら授業を行っても、次のクラスで使用する時は、最初の画面に戻すことが容易にできるので、模造紙などに書き込んでしまう場合と違ってたいへん便利です。また、データはパソコンの中に保存できるので、使った資料

の整理が容易です。

※ ぜひ積極的にICTを授業に取り入れて、誰もがわかりやすいインクルーシブな授業を目指しましょう。

**Q. ひとりでも堂々と表現できる児童生徒を目指したいと思っています。どのように指導・支援をしていけばよいのでしょうか？**

A. 普段の授業の中で、無理なく「ひとりで演奏する」場面を作る方法があります。

- ① リズム遊び・音遊びで、「みんなで演奏する」中に「ひとりで演奏する」を入れながらつなげていく方法があります（サークルゲーム 等）。ひとりが演奏したものを聴き取ってすぐ反復するようにすると、集中力や耳も鍛えられて一石二鳥です。
- ② 「しあわせなら手をたたこう」の最初の2小節を使って、ひとりずつ「♪しあわせなら〇〇しよう」と歌い出し、その後全員で「♪しあわせなら〇〇しよう」と歌いつなげていきます。音域的に無理がないので誰でもできますし、「〇〇しよう」の動作化で、楽しく取り組むことができます。
- ③ 鍵盤ハーモニカ奏やリコーダー奏で旋律がおよそ演奏できるようになったら、2小節ずつの「リレー奏」に取り組んでみたらどうでしょうか。「音」という見えないバトンを上手に渡すのは、意外に緊張感を伴います。初めはどこを演奏するのか事前にはっきりさせて、練習させてもよいでしょう。苦手な子どもには演奏しやすい部分を指定して、「できる」喜びをぜひ感じさせましょう。2小節ならけっこう練習を頑張れますよ。
- ④ 愛唱歌で「リレー唱」に取り組んでみたらどうでしょうか？これも、最初は歌うことに苦手意識のある子どもに歌いやすい部分を選ばせたり、一緒に小さな声で歌ったりする配慮が必要です。積み重ねることによって、「ひとりでも歌うことが当たり前」になったらしめたものです。

いずれにせよ、学習集団の中に温かい人間関係が成立していることが大事です。音楽の授業を通して、「心」を育てていきたいですね。

**Q. 中学校に入学しアルトリコーダーを手にした生徒。小学校のソプラノリコーダーの指使いをやっと覚えたのに、中学のアルトは指使いが違う…。少ない授業数で新しい指使いを覚えられない。そんな時、どうしたらよいのでしょうか？**

A. 指使いは新しくなるのではなく、ソプラノリコーダーとずれているだけです。そこで吹奏楽の管楽器のように、アルトリコーダーはF管の移調楽器だと思えばどうでしょう。

つまり、ソプラノリコーダーの楽譜を完全5度高くして、実音の「C」が「ソ」の指使いになる移調楽譜を作るということです。楽譜を移調するのは多少面倒ですが、パソコンの楽譜作成ソフトで楽譜をスキャンして移調すれば、わりと簡単です。

そこから調性や、移調楽器についての指導にも広げられる可能性が生まれます。また、篠笛の長さによる調子の違いや、尺八の長さの種類にも発展できるかもしれません。

Q. リコーダーの技能が子どもによって差があり、得意な子どもを待たせてしまうことがあります。どうしたらいいですか？

A. つけたい力に照らし、複数の楽譜を用意して子どもが選択できるようにしてみましょう。また、つけたい力からそれないように配慮したうえで、得意な子どもには別のパートを与え、アンサンブルができるようにしてみましょう。

Q. 部活動やクラブ活動でやる気に温度差ができてしまいます。どのようにしたら良いのでしょうか？

A. どうしても部長(クラブ長)や副部長(副クラブ長)は一生懸命やろうとしますが周りがついてこない、ということが起こりがちです。しかし、周りの子どももやる気はあるはずで、何をやったら良いかわからない、一部の子どもみみの運営で自分自身のやる気をなくしてしまったという子どもも多いかもしれません。そこで全員が参加して活動の運営をしていけるシステム作りが大切なのではないでしょうか。そのための方法を2つ提案したいと思います。

① 係活動を全員に割り振る

人数が多いと係活動を考えることも難しいですが、一人一役何かやることがあると活動への取り組みも変わってきます。自分が動く活動が進んでいくという体験ができるとういことが良いですね。係活動としての例をいくつか紹介します。

技能向上係・・・基礎練習を進めます。

清掃係・・・清掃の時間を10分程度設け、毎回進行反省を行います。

イベント係・・・1年に4回程度のクラブ内のイベントを企画し運営します。

広報係・・・毎月テーマを決めて、テーマに沿って部員が書いたものを通信にして配布します。

印刷係・・・先生と一緒に楽譜の印刷をしたり、雑誌の印刷をして部員に紹介したりします。

などなど

様々な係が他にもできますので、試してみるのも良いと思います。

② 上級生が練習計画や進行を日替わりで行う

どうしても、部活やクラブの長が毎日仕切って活動を行うようになってしまいます。そこで、練習計画や進行を最高学年全員で回していきます。その日の責任者が、毎日変わるということです。そして、最後に今日一日の活動反省を全員の前で話します。そのようなちょっとしたことで、責任感ややる気が出てくるきっかけになるのではないのでしょうか。

Q. 特別支援学校に赴任することになりました。耳が不自由な子どもたちに対してどのような音楽の授業を行ったら良いのか、とても不安に感じています。聴覚障害児にとって、音楽の授業はどのような意味があるのでしょうか。

A. 聴覚障害児は、音そのものの聴取ができない場合でも、音の振動から音の高低を聴き分けることができます。また、リズムを通して言葉や身体を意識させたり、感情表現の幅を広げたりするなどの効果が期待できます。グループ活動の際に、他者と協働する喜びを感じながら、社会性を育むことも重要です。ぜひ積極的に音楽活動を行ってみてください。